

Level 10

2014年度 第2回

問題用紙

検定開始の合図があるまで問題を開いてはいけません。

まず、下記の注意をよく読んでください。

●検定上の注意●

1. 検定時間は 90 分です。
2. 検定開始前に答案用紙に受検番号・氏名・生年月日を必ず記入してください。
3. 検定が始まって、印刷が見えにくかったり、ページがおかしかったりしたら、手をあげて監督者に知らせてください。
4. 問題のあいているところは自由に利用してください。
5. 問題は、答案用紙と一緒に回収します。

受検番号

氏名

問題一

第一問

後の問題文には(1)～(5)のような論理的に誤った箇所があります。それぞれ(1)～(5)に該当する誤った箇所の行数を答え、間違いを抜き出し、また、それを正しい形に直しなさい。

- (1) 主語と述語の関係がおかしい。
- (2) 言葉のつながりが間違っている。
- (3) 助詞・助動詞が間違っている。
- (4) 接続語が間違っている。
- (5) 読点の打ち方が間違っている。

第二問

問題文を二つの段落に分けて、第二、三段落の最初の七字(句読点を含む)をそれぞれ抜き出しなさい。

【問題文】

1 鳥たちはなぜさえずるのだろうか。春はウグイスと言われるように鳥のさえずりには季節性があり、雄しかさえずらない鳥が非常に多い。これらのことから、その機能は次の二つ、なわばり獲得のための雄どうしの競争で自分のなわばりを宣言することと、雌に対して自分の魅力を誇示することだと考えられるのではなからうか。まず、なわばり獲得の宣言に

5 関する機能についてしらべてみよう。さえずる鳥のいくつかの種類では、なわばりを維持し続けるために常に、さえずる必要があることは、昔から知られている。そのことを確かめるために、イギリスのある研究者は次のような実験をした。

5 森の一面になわばりを持っている雄を全部捕まえ、なわばりの持ち主をなくした。そうして持ち主のなくなった場所を三つに分け、一箇所はそのまま空にしておいた。もう一箇所には、四つのスピーカーとテープレコーダーとを配置し、その雄のさえずりが時間をおいてあちこちのスピーカーから流れるようにした。残りの一箇所は、四つの同じようにスピーカーを配置し、スピーという単調な笛の音を流した。そうしたところ、実験を開始して約八時間のあいだに、持ち主がいなくてさえずりが聞こえない区画と、笛の音だけがする区画には、さっそく新しい雄たちが入りこんでなわばりを乗っ取ってしまった。一方、スピーカーがさえずりを流している区画には一羽も進入しなかった。しかし、二日もたつと、い

10 くらスピーカーでさえずりを流していても、本人がいないことが明らかになったらしく、すべてのなわばりは、他の雄によつて占有されてしまった。さえずりだけで本人がいなければ、やがては侵入されてしまうが、なわばりを維持していくにはさえずらないといけないことは確かなようだ。次に、雌に対する自分の魅力の誇示についてはどうなのだろうか。シ

15 ジュウカラの雄は、つれあいの雌が決まるまではよくさえずるが、つれあいが決まると、さえずる頻度がずいぶん低くなる。たとえば、つれあいの雌を実験的に取り除いてみたところ、雄はまたさかんにさえずるようになった。そして、つれあいを戻してやると、またさえずりの頻度は低くなったのである。このことは、シジュウカラのさえずりが雌を引きつけるための機能も果たしている。

問題口 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

冬が来て私は日光浴をやりはじめた。溪間の温泉宿なので日が翳り易い。溪の風景は朝遅くまでは日影のなかに澄んでいる。やつと十時頃溪向こうの山に堰きとめられていた日光が閃々と私の窓を射はじめる。窓を開けて仰ぐと、溪の空は虻や蜂の光点が忙しく飛び交っている。白く輝いた蜘蛛の糸が弓形に膨らんで幾条も幾条も流れてゆく。(その糸の上には、なんとという小さな天女！ 蜘蛛が乗っているのである。彼らはそうして自分らの身体を溪のこちら岸からあちら岸へ運ぶものらしい。) 昆虫。昆虫。初冬といっても①彼らの活動は空に織るようである。日光が檜の梢に染まりはじめる。するとその梢からは白い水蒸気のようなものが立ちのぼる。霜が溶けるのだろうか。溶けた霜が蒸発するのだろうか。いや、それも昆虫である。微粒子のような羽虫がそんなふう群がっている。②そこへ日が当たったのである。

私は開け放った窓のなかで半裸体の身体を晒しながら、そうした内湾のように賑やかな溪の空を眺めている。すると

③彼らがやって来るのである。彼らのやって来るのは私の部屋の天井からである。日蔭ではよぼよぼとしている彼らは日なたのなかへ下りて来るやよみがえったように活気づく。私の脛へひやりととまったり、両脚を挙げて腋の下を搔くようなまねをしたり手をすりあわせたり、かと思うと弱よわしく飛び立っては絡み合ったりするのである。そうした彼らを見ていると彼らがどんなに日光を恰しんでいるかが憐れなほど理解される。とにかく彼らが嬉戯するような表情をするのは日なたのなかばかりである。それに彼らは窓が明いている間は日なたのなかから一步も出ようとはしない。日が翳るまで、移ってゆく日なたのなかで遊んでいるのである。虻や蜂があんなにも澁刺と飛び廻っている外気のなかへも決して飛び立とうとはせ

ず、なぜか④病人である私をまねている。しかしなんとという「生きんとする意志」であろう！ 彼らは日光のなかでは交尾することを忘れない。おそらく枯死からはそう遠くない彼らが！

日光浴をするとき私の傍らに彼らを見るのは私の日課のようになってしまっていた。私は微かな好奇心と一種馴染なじみの気持から彼らを殺したりはしなかった。また夏の頃のように猛だけしい蠅捕り蜘蛛はえがやって来るのでもなかった。そうした外敵からは彼らは安全であったと言えるのである。しかし毎日たいてい二匹ほどの彼らがなくなっていた。それはほかでもない。牛乳の壘びんである。私は自分の飲みっ放しを日なたのなかへ置いておく。すると毎日決まったようにそのなかへはいつて出られないやつができた。壘の内側を身体に付著した牛乳を引きずりながらのぼって来るのであるが、力のない彼らはどうしても途中で落ちてしまう。私は時どきそれを眺めていたりしたが、こちらが「もう落ちる時分だ」と思う頃、蠅も「ああ、もう落ちそうだ」というふうに動かなくなる。そして案の定落ちてしまう。それは見ていて決して残酷でなくはなかった。しかし⑤それを助けてやるというような気持は私の倦怠アンニユイからは起こって来ない。彼らはそのまま女中が下げてゆく。蓋ふたをしておいてやるという注意もなおのことでできない。翌日になるとまた一匹ほどはいつて同じことを繰り返していた。

「蠅と日光浴をしている男」いま諸君の目にはそうした表象が浮かんでいるにちがいない。日光浴を書いたついでに私はもう一つの表象「日光浴をしながら太陽を憎んでいる男」を書いてゆこう。

私の滞在はこの冬で二た冬目であった。私は好んでこんな山間にやって来ているわけではなかった。私は早く都会へ帰

りたい。帰りたいたいながら二た冬もいてしまったのである。いつまで経っても私の「疲労」は私を解放しなかった。私が都会を想い浮かべること⑥私の「疲労」は絶望に満ちた街々を描き出す。それはいつになっても変改されない。そしてはじめ心に決めていた都会へ帰る日取りはとうの昔に過ぎ去ったまま、いまはその影も形もなくなっていたのである。私は日を浴びていても、否、日を浴びるときはことに、太陽を憎むことばかり考えていた。結局は私を生かさないのである太陽。しかもうつとりとした生の（1）で私を瞞だまそうとする太陽。おお、私の太陽。私はだらしのない愛情のように太陽が癩しやくに触った。けごろものようなものは、反対に、緊迫ストリート・ジャケット衣のように私を圧迫した。狂人のような悶もたえでそれを引き裂き、私を殺すであろう（2）のなかの自由をひたすらに私は欲した。

こうした感情は日光浴の際身体の受ける生理的な変化——旺さかんになって来る血行や、それにしたがって鈍麻してゆく頭脳や——そう言ったもののなかに確かにその原因を持っている。鋭い悲哀を和らげ、ほかほかと心を怡たのします快感は、同時に重つ苦しい不快感である。この不快感は日光浴の済んだあとなんとも言えない虚無的な疲れで病人を打ち敗かしてしまふ。おそらくそれへの嫌悪から私のそうした憎悪も^{※①}胚胎はいたいしたのかもしれないのである。

しかし私の憎悪はそればかりではなく、太陽が風景へ与える効果——眼からの効果——の上にも形成されていた。私が最後に都会にいた頃——それは冬至に間もない頃であったが——私は毎日自分の窓の風景から消えてゆく日影に限りない（3）を持っていた。私は墨汁のようにこみあげて来る悔恨といらだたしさの感情で、風景を埋めてゆく影を眺めていた。そして落日を見ようとする切なさに駆られながら、見透しのつかない街を慌てふためいてうろろしたので

ある。今の私にはもうそんな愛惜はなかった。私は日の当った風景の象徴する幸福な感情を否定するのではない。その幸福は今や私を傷つける。私はそれを憎むのである。

溪の向こう側には杉林が山腹を蔽^{おほ}っている。私は太陽光線の（4）をいつもその杉林で感じた。昼間日が当たっているとときそれはただ雑然とした杉の秀^ほの堆積としか見えなかった。それが夕方になり光が空からの反射光線に変わるとはつきりした遠近にわかれて来るのだった。一本一本の木が犯しがたい威厳をあらわして来、しんしんと立ち並び、立ち静まって来るのである。そして昼間は感じられなかった地域がかしここに杉の秀並みの間へ想像されるようになる。溪側にはまた檜や椎の常緑樹に交じって一本の落葉樹が裸の枝に朱色の実を垂れて立っていた。その色は昼間は白く粉を吹いたように疲れている。それが夕方になると眼が吸いつくばかりの鮮やかさに冴える。元来一つの物に一つの色彩が固有しているというわけのものではない。だから私はそれをも欺瞞^{ぎまん}と言うのではない。しかし直射光線には（5）があり、一つの物象の色をその周囲の色との正しい階調から破ってしまうのである。そればかりではない。全反射がある。日蔭は日なたとの対照で闇のようになってしまう。なんという雑多な混濁だろう。そしてすべてそうしたことが日の当った風景を作りあげているのである。そこには感情の弛緩があり、神経の鈍麻があり、理性の欺瞞がある。これがその象徴する幸福の内容である。おそらく世間における幸福がそれらを条件としているように。

私は以前とは反対に溪間を冷たく沈ませてゆく夕方を——わずかの時間しか地上に駐^{とど}まらない黄昏^{たそがれ}の厳^{おきて}かな掟^{おきて}を——待つようになった。それは日が地上を去って行ったあと、路の上の潦^{みずたまり}を白く光らせながら空から下りて来る反射光線で

ある。たとえ人はそのなかでは幸福ではないにしても、そこには私の眼を澄ませ心を透き徹らせる風景があった。

「平俗な日なため！ 早く消えろ。いくら貴様が風景に愛情を与え、冬の蠅を活気づけても、俺を愚昧化することだけはできぬわい。俺は貴様の弟子の外光派に唾をひっかける。俺は今度会ったら医者に抗議を申し込んでやる」

日に当りながら私の憎悪はだんだんたかまってゆく。しかしなんとという「生きんとする意志」であろう。日なたのなかの彼らは永久に彼らの怡しきを見棄てない。壇のなかのやつも永久に登っては落ち、登っては落ちては落ちている。

やがて日が翳りはじめ。高い椎の樹へ隠れるのである。直射光線が気疎い^{けうと}回折光線にうつろいはじめ。彼らの影も私の脛の影も不思議な鮮やかさを帯びて来る。そして私はどてらをまとしてガラス窓を閉しかかるのであった。

梶井基次郎「冬の蠅」^{かじい もとじろう はえ}

※① 胚胎：みごもること。物事の起こる原因や兆しが生じること。

第一問 —— 線部①②③は何を指しているか。それぞれ三字以内で抜き出さない。ただし「昆虫」は不可。

第二問 —— 線部④とあるが、それはどういうことか、四十字以内で具体的に説明しなさい。（句読点を含む。）

第三問 —— 線部⑤は何を指しているか、十字以内で具体的に答えなさい。（句読点を含む。）

第四問 — 線部⑥とはなぜか、四十字以内で具体的に説明しなさい。(句読点を含む。)

第五問 (1) (5) に入る言葉を、次のア～オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 愛惜 イ 欺瞞ぎまん ウ 幻影 エ 偏波 オ 酷寒

第六問 問題文中で、過去のことについて書かれた箇所がある。その箇所の初めと終わりの五字をそれぞれ抜き出しなさい。
(句読点を含まない。)

第七問 次のア～カの中で、本文の内容の説明として不適切なものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 蠅はえは日なたが好きで、そこでは生きようとする意志を見せるが、決して部屋の外には出ようとしな
イ 檜こずえの梢から水蒸気のような白いものが蒸発して見えるのは、霜が解けて蒸発するからである。
ウ 蠅は毎日二匹ほど牛乳瓶の中に落ちて、懸命はに這い上がるうとはするが、最後は力尽きてしまう。
エ 私が太陽を憎むのは、太陽がだらしのない愛情のように、私をだましたあげく最後は生かさないからである。
オ 今の私は日の当たった風景を求めている、愛惜のあまり、落日を見ようと街をうろめくこともあった。
カ 私は幸福にはなれないと信じていたから、それを象徴する日の当たる風景を憎むようになっていた。

問題目 次の問いに答えなさい。

第一問 次の言葉を並べ替えて一文を作るときに、不要な言葉があります。それぞれ二つずつ答えなさい。

- (1) では 続ける 教養とは なく 力だ あるいは 単なる 考え 真の 書物 知識。
(2) 名文を 文章力を 写す 音読 有効だ する 書き ことは つけるには 。

第二問 次の言葉を並べ替えて、一文を作りなさい。

- (1) は シーン 映画の 圧巻 ラスト だ この。
(2) すべてが 振る いた 彼女の されて 舞いの 洗練。

第三問 次の言葉を並べ替えて、一文を作りなさい。

- (1) 変 だ 必 機 要 な 臨 答 応 返 が。
(2) す を 解 は ぎ 問 釈 拡 君 だ 題 大 し。

第四問 次の文章の主題を十五字以内でまとめなさい。なお、主題とは筆者の主張を語句の形にまとめたものである。

役者が舞台に立つ時、果たして自分の姿が観客の目にどう映っているのかが分かりません。自分が美しく振る舞っているつもりでも、観客の目にはぶざまに映っているかもしれないのです。自分自身が意識する自分の姿と、観客の目に実際に映っている自分の姿にズレが生じると、その役者はとても一流にはなれません。そこで、世阿弥は自分の姿を離れたところから客観的に捉えなさいと言ったのです。それが「離見の見」です。

ところが、人間は自分の前にあるものしか見ることができない、まさに主観的な存在です。では、どうすればいいのでしょうか。

世阿弥はさらに「目前心後」という言葉を使いました。「自分の目の前の目」を利用して、自分自身の姿を捉えます。「自分の目の前の目」とは何でしょうか。

もちろん、それは観客の目に他なりません。観客の目に自分がいつもどう映っているのか、世阿弥は能を演じながら、絶えず観客の目を想定して自分自身の姿を正確に捉えようと思いました。もちろん、実際には不可能であって、これは意識の持ち方の問題だと言えるでしょう。そして、観客の目を想定して自分の姿を捉えたのですが、それでも自分の後ろ姿は観客の目には映りません。そこで、「心後」。つまり、心を後ろに置けと言ったのです。これは非常に難解な言葉ですね。おそらく、想像力を働かせて、自分の後ろ姿を絶えず正確に捉えなさいと言ったことでしょう。

「目前」と「心後」が見事に調和した時、世阿弥は「離見の見」が実現されると考えていたようです。まさにこの世阿弥の言葉こそ、何も役者に限らず、私たちにも大いに必要なことなのです。

出口 汪

「使える論理力」

第五問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

それは或^{ある}本屋の二階だった。二十歳の彼は書棚にかけた西洋風の梯子^{はしこ}に登り、新らしい本を探していた。モオパスサン、ボオドレエル、ストリントベリイ、イブセン、シヨウ、トルストイ、……

そのうちに日の暮は迫り出した。しかし彼は熱心に本の背文字を読みつづけた。そこに並んでいるのは本というよりもむしろ世紀末それ自身だった。ニイチエ、ヴェルレエン、ゴンクウル兄弟、ダスタエフスキイ、ハウプトマン、フロオベエル、……

彼は薄暗がり^{うすくらがり}と戦いながら、彼等の名前を数えて行った。が、本はおのづからもの憂い影の中に沈みはじめた。彼はとうとう根気も尽き、西洋風の梯子を下りようとした。すると傘のない電燈が一つ、丁度彼の頭の上に突然ばかりと火をともした。彼は梯子の上に佇^{たまたま}んだまま、本の間に動いている店員や客を見下した。彼等は妙に小さかった。のみならず如何にも見すばらしかった。

「
彼は暫く梯子の上からこう言う彼等を見渡していた。……」

芥川 龍之介 「ある阿呆^{あほう}の一生」

問 「」に入る言葉を、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 世紀末の文学が私を途方に暮れさせた。
- イ 人間はアリのように小さく、愚かなものである。
- ウ 人生は一行のボオドレエルにもしくない。
- エ 人は世紀末の文学を理解しようとはしない。

問題Ⅱ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

A 私はかくの如くにして私自身である。けれども私の周囲に在る人や物やは明かに私ではない。私が一つの言葉を申し出る時、私以外の誰が、(a) 何が、私はその言葉をあらしめるようにあらしめ得るか。私は周囲の人と物とにどう繋がれたら正しい関係におかれるのであろう。如何なる関係も可能ではあり得ないのか。可能ならばそれを私はどうして見出せばいいのか。誰がそれを私に教えてくれるのだろうか。……結局それは私自身ではないか。

B 思えばそれは寂しい道である。最も無力なる私は私自身にたよる外の何物をも持っていない。自己に矛盾し、自己に※①蹉さてつ跌し、自己に困迷する、それに何の不思議があるうぞ。私は時々私自身に対して神のように寛大になる。それは時々私の姿が、母を失った※②嬰兒えいじの如く私の眼に映るからだ。嬰兒は何処をあてどもなく※③匍ほふく匍する。その姿は既に十分憐あわれまれるに足る。嬰兒はしばしば過つて火に陥る、もしくは水に溺おぼれる。そして僅かにそこから這はい出ると、べそをかきながら又匍匐を続けて行く。このいたいけな姿を憐れむのを自己に阿るものとのみ云い退けられるものであるうか。

(b) 道德がそれを自己耽溺たんできと罵らば罵れ、私は自己に対するこの哀憐あいにんの情を失うに忍びない。孤独な者は自分の掌を見つめることにすら、熱い涙をさそわれるのではないか。

C 恐るべき永劫えいじょうが私の周囲にはある。永劫は恐ろしい。或る時には氷のように冷やかな、凝然としてよどみわたった或るものとして私にせまる。又或る時は眼もくらむばかりかがやかしい、瞬間も動揺流転をやめぬ或るものとして私にせまる。私はそのものの隅か、中央かに落された点に過ぎない。広さと幅と高さとを点は持たぬと幾何学は私に教える。私は永劫に対して私自身を点に等しいと思う。永劫の前に立つ私は何ものでもないだろう。(c) 点が存在する如く私もまた永劫の中に存在する。私は点となって生れ出た。そして瞬く中に跡形もなく永劫の中に溶け込んでしまつて、私はいなくなるのだ。それも私は知っている。そして私はいなくなるのを恐ろしく思うよりも、点となつてここに私が私として生れ出たことを恐ろしく思う。

(d) 私は生れ出た。私はそれを知る。私自身がこの事実を知る主体である以上、この私の生命は何といっても私のものだ。私はこの生命を私の思うように生きることが出来るのだ。私の唯一の所有よ。私はすべての懷疑にかかわらず、結局それを尊重愛撫^{あいぶ}しないでいられようか。涙にまで私は自身を痛感する。

D 一人の旅客が永劫の道を行く。彼を彼自身のように知っているものは何処にもいない。陽の照る時には、彼の忠実な伴侶はその影であるだろう。空が曇り果てる時には、そして夜には、伴侶たるべき彼の影もない。その時彼は独り彼のうちのみ忠実な伴侶を見出さねばならぬ。拙くとも、醜くとも、彼にとっては、彼以上のものを何処に求め得よう。こう私は自分を一人の旅客にして見る時もある。

E 思えばそれは険しい道でもある。私の (1) とは私自身だと知るのは、私を極度に (2) にする。他人に対しては与え得ないきびしい鞭打^{むち}を与えざるを得ないものは^{※④}畢竟^{ひつじょう}自身に対してだ。誘惑にかかったように私はそこに導かれる。^{※⑤}答^{こた}にはげまされて振り立つ私を見るのも、打撲に抵抗し切れなくなって倒れ伏す私を見るのも、共に私が生きて行く上に、無くてはならぬものであるのを知る。その時に私は勇ましい。私の前には力一杯に生活する私の外には何物をも見ない。私は乗り越え乗り越え、自分の力に押され押されて未見の境界へと陰難を侵して進む。そして如何なる生命の威脅にもおびえまいとする。その時傷の痛みは私に或る甘さを味わせる。しかしこの自己緊張の極点には往々にして恐ろしい自己疑惑が私を待ち設けている。遂に私は疲れ果てようとする。私の力がもうこの上には私を動かさし得ないと思わ

れるような瞬間が来る。私の唯一つの（3）なる私自身が見る見る廢墟はいきよの姿を現わすのを見なければならぬのは、私の眼前を暗黒にする。

けれどもそれらの不安や失望が常に私を脅かすにもかかわらず、太初はじめの何であるかを知らない私には、自身をおいてたよるべき何物もない。すべての矛盾と渾沌こんとんの中にあつて私は私自身であろう。私を實価以上に値ぶみすることをしまい。私を實価以下に虐待することもしまい。私は私の正しい価の中にあることを勉めよう。私の価値がいかに低いものであるうとも、私の正しい価値の中にあるうとするそのこと自身は何物かであらねばならぬ。よしそれが何物でもないにしろ、その外に私の採るべき態度はないではないか。一個の金剛石を持つものは、その宝玉の正しい（4）においてそれを持とうと願うのだろう。私の私自身は宝玉のように尊いものではないかも知れない。しかし心持においては宝玉を持つ人の心持と少しも変るところがない。

私は私のもの、私のただ一つのもの。私は私自身を何物にも代え難く愛することから始めねばならない。

（e）私のこの貧しい感想を読む人があつた時、この出発点を（5）することが出来ないならば、私はその人に更にいい進むべき何物をも持ち得ない。太初がことばであるか行わざであるかを（考えるのではなく）知り切っている人に取りつては、この感想は無視さるべき無益なものであるう。私は自分が極めて低い生活途上に立っているものであることをよく知りぬいている。ただ、今の私はそこに一番堅固な立場を持つているが故に、そこに立つことを恥じるとするもの。前にもいったように、私はより高い大きなものに対する欲求をもつて、知り得たる現在に安住し得るのを自己に感謝する。

ありしま たけお
有島 武郎 「惜しみなく愛は奪う」

※① 蹉跌：物事がうまく進まず、しくじること。挫折。失敗。

※② 嬰兒：生まれたばかりの赤ん坊。乳児。

※③ 匍匐：腹ばいになって、手足ではうこと。

※④ 畢竟：さまざまな経過を経ても最終的な結論としては。結局。要するに。

※⑤ 答：昔、罪人を打つのに用いたむち。比喩的に、人を責める厳しい戒め。

第一問 A、D の文章を正しい順番に並べ替え、記号で答えなさい。

第二問 —— 線部とは何か、五字以内で答えなさい。

第三問 (1) (5) に入る言葉を、次のア、イ、ウ、エ、オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア	客体	イ	他人	ウ	厳粛	エ	概念	オ	主体
カ	寛容	キ	城郭	ク	断罪	ケ	価値	コ	首肯

第四問 段落 E の中で論理的に間違ったところが一箇所あります。その箇所を一字で抜き出し、三字以内で修正しなさい。

第五問 (a) (e) に入る言葉として、最も適切なものを次の ア ～ オ の中から選び、記号で答えなさい。

- ア それでも イ しかし ウ もし エ そして オ たとえ

問題 4

論理的な文章とは、不特定多数の読者に向けて、自分の主張をなるべく誤解のないように筋道を立て、しかも、正確に伝えようとしたものです。自分が思っていることを、すべての読者が同じように思っているとは限らないので、自分の主張に対しては論証責任が生じます。

以上を頭に置いて、① ～ ⑩ の言葉を使って、「もの」と「こと」について論じなさい。なお、後の五つの条件を満たすこと。

【使用する言葉】 ※すべての言葉を使わなくてもよい。

- | | | | | |
|-------|------|------|--------|--------|
| ① もの | ② こと | ③ 人 | ④ 形がある | ⑤ 形がない |
| ⑥ 十字架 | ⑦ 表情 | ⑧ 音楽 | ⑨ 心 | ⑩ 仏像 |

【条件】

条件1 次の文章を参照すること。

「こと」とは形のないものこと、「もの」とは形を持ったものことである。私たちの世界では、形のない「こと」は、形のある「もの」を通して初めて認識できるのである。

条件2 制限字数は、句読点を含めて二百五十字以上、三百五十字以内。

条件3 具体例から始めて、最後に自己の主張をまとめる。

条件4 三つの段落に分ける。

条件5 原稿用紙の表記上の規則に従う。(段落の書き始めは一字下げるなど。)

